

印刷教育研究会の進展を期待

木下堯博

(印刷教育研究会初代会長・現顧問、国際印刷大学校長*、
九州産業大学名誉教授・工学博士)

1、はじめに

25年前の1985年(昭和60年)9月29日、日本離島センタービルで印刷教育研究会の設立総会が開催された。設立の目的は印刷教育の理念の確立と印刷産業の発展並びに印刷教育機関の充実にあった。発起人10名は準備のため、あらかじめ会合を、数回行い、それぞれ分担し、設立総会へと展開した。

1978年から印刷出版研究所の協力により、印刷技術指導用教材(高校から大学レベル)の編集制作を開始し、「基礎写真製版(1980年)」「印刷画像材料(1984年)」「カラスキャナー表現(1980年)」などの編集、刊行してきた。

これらの編集手当や原稿料を原資として、印刷教育研究会の設立準備費とした。

この設立に先立ち、1982年7月27日に国際印刷教育会議を福岡市で開催した。この会議には国内はもとより、韓国、台湾の印刷教育機関から多数の参加者があり、地の福岡県印刷工業組合の当時の大隈理事長の協力により、盛大に行われた。

1980年のシカゴでのprint80でRITとの交流があり、この国際印刷教育会議の1982年から東アジアでの印刷教育の活動を開始、その後、ヨーロッパ、ロシア、中国などとの印刷教育研究の交流が進んだが、更なる進展を目指し努力する必要がある。

2、印刷教育の研究活動

日本の印刷出荷額はアメリカに次いで世界第2位であるにもかかわらず、印刷教育研究機関は残念ながら皆無となり、日本各地で印刷教育機関設立運動(1)を展開してきたが、収益性や教材機具などの膨大な設備投資などにより、後退を余儀なくされてきた。

韓国では釜慶大学校、中部大学校、東国大学校、新丘大学校の印刷系学科の他、新しく建国大学校、順川大学校に印刷メディア系学科の設立運動(2)が展開されている。

一方、アメリカでは印刷系大学、短大など100校余りあるが、本年9月11日から開催のprint09(Chicago)でTeacher's Conferenceが9月13日まで行われる。

また、IGAEA(International Graphic Arts Education)では第84回印刷教育研究発表大会が2009年7月26日から30日まで東ケンタッキー大学で実施される。興味あるテーマは西イリノイ大学から「デジタル印刷技術の教育研究」の報告であろう。

更に、日本でおなじみのWhat They ThinkのJ.Webb氏が「印刷産業の再生論」などを始め、多くの論文が4日間にわたり、発表される。

ヨーロッパではdrupa2004、2008やIPEX2006に於いて各印刷系大学の出展があり、EU各国の印刷教育機関のカリキュラム会議などがもたれた。

東欧圏(ロシアを含む)は独自の印刷教育研究会組織がある。2009年10月28日から11月2日までモスクワでPolygraphInter2009の印刷機材展が開催、この

期間に Media Fest 21 の Conference が行われる。モスクワ印刷大学の主催による学術・文化講演会も同時に実施され、ロシア、東欧各国の印刷教育機関からの参加が見込まれている。筆者も発表論文のアブストを提出予定である。このように印刷教育の中心となっている各国の大学は RIT (アメリカ)、LCC (イギリス)、ダルムシュタット工科大学 (ドイツ)、モスクワ印刷大学 (ロシア)、北京印刷学院 (中国)、釜慶大学 (韓国)、中国文化大学 (台湾) などで、日本の印刷教育機関は印刷の看板を降ろし、印刷教育から後退していった。この現状から印刷教育研究会への役割がかなり大きい。

3、人類の発展に貢献

印刷技術は押印からはじまるが、複製・生産活動の基点はヨーロッパでは Gutenberg (1440年)、東洋では畢昇「PiJen」(1041年)により活字の文字伝達のコミュニケーションから創造活動への根源となった。また、韓国の「直指」は1377年に活字で印刷されたことが立証されユネスコの認証を受け、今回(2009年9月2日)に「世界の記録」に対し直指賞の授与式典が清州古印刷博物館で実施される。

日本では長崎の大光寺で本木昌造顕彰会により9月3日に134回忌が行われる。このように各国で印刷技術を確立した人物と時代背景など印刷史の立場からの研究が進展していて、Gutenberg(Gutenberg 博物館、マインツ大学)、カクストン(セントブライトン博物館、ロンドン大学)、畢昇(中国印刷博物館、北京印刷学院)、直指(清州古印刷博物館、忠北大学、忠南大学)、天草版(天草資料館、長崎純心大学)、本木昌造(長崎歴史博物館、国際印刷大学)など印刷による人類発展に貢献した歴史上の人物や印刷画像などの時代背景に関し、学術的解明がなされている。各印刷博物館は印刷教育の場でもあり、現代のデジタル技術の本質を解明する機関でもある。

4、まとめ

近年、「感性価値創造」が印刷産業界で導入されているが、デザイン系学科群では感性を科学的・定量的に究明するための感性工学会が設立されている。印刷画像の評価には人間の視覚による判断が必然であり、科学的定量を組み合わせ評価することが大切である。キルケゴールは美的実存から論理実存、宗教的実存への体系を構築し、人間には美的実存が根底にあるとした。従って、印刷画像の美的評価は印刷技術や印刷教育の発展の第一歩であろう。印刷教育研究会創立25周年に際し、原点を見直し、一致団結してこの不況の難関を乗り越え、印刷教育をあらゆる分野へ拡大成長させることにより印刷産業発展のための新人材育成論が誕生することを期待している。最後に、賛助会員及び正会員の皆様の一層のご発展と印刷教育研究会へのご支援をお願い致します。

参考文献

(1) 首都大学東京に改組される時、印刷学部の設立の要望をしたが認められなかった。

(2) 2009年5月22日、韓国印刷学会春季研究発表会の懇親会で確認された。

(印刷教育研究 No.24, 「発行2009年9月4日総会」, 受理年月日; 2009年7月21日)

連絡先* <http://www.media-igu.com> E-Mail; kinoaki@mpd.biglobe.ne.jp